

宮座研究における近江の位置

橋本章

宮座論の形成と展開における滋賀県下事例の意義について

Position of *Oni* in *Miya-za* Studies : Meaning of the Case Example in Shiga Prefecture in the Formation and Development of *Miya-za* Theory

HASHIMOTO Akira

はじめに

- ① 宮座研究における近江の事例の位置
 - ② 肥後和男による宮座研究と滋賀の事例
 - ③ 「典型的な宮座」「変形的な宮座」論争と滋賀の事例
 - ④ イメージとしての「宮座」の構築
- おわりに

【論文要旨】

宮座に関する研究は、かつては歴史学や民俗学、そして社会学など数々の分野がその研究対象として注目してきた課題であった。それは、ひとつには宮座を題材とした研究について、歴史学や社会学など数々の分野の研究者が取り組むという、学際的な雰囲気の中かでその議論が醸成されてきたことも深くかわつていようにも見受けられる。しかしながら、研究課題の細分化が進んだ昨今の状況では、宮座を主題化した研究がさほどの進展を見せないまま沈滞するに至っている。しかし、民俗として各地に伝承されている宮座事例は、村落史や村落共同体のあり方を解明する指標として有効である。宮座という課題を今一度各分野それぞれの研究の俎上にのせるためには、これまでの議論がどのような背景を持つ研究者からどのように提示され、またその議論が展開されてゆく過程で、その対象となった事例がどのように取り扱われてき

たのかを検証する必要があるものと思われる。

肥後和男による近江の宮座事例の歩みに始まる滋賀県下の本格的な宮座研究は、「株座」と「村座」という宮座概念の本質にも迫る課題を世に示し、また萩原龍夫が馬淵の宮座を題材として提起した「典型的な宮座」という言説もまた「宮座とは何か」という議論を醸成する契機となった。ただ、滋賀県下の事例への偏重がみられる宮座研究には、若干の危うさもまた指摘できるものと思われる。また、民俗事例から類推された宮座と村落史との連関性についても、馬淵の宮座をめぐる萩原の説に対する「典型的」か「変形的」か、といった論争にみられる如く、宮座を研究する者達の事例に対する印象の如何によって、その様相は一変する可能性も孕むのである。

【キーワード】 宮座文献目録、肥後和男、萩原龍夫、史料と伝承、物語

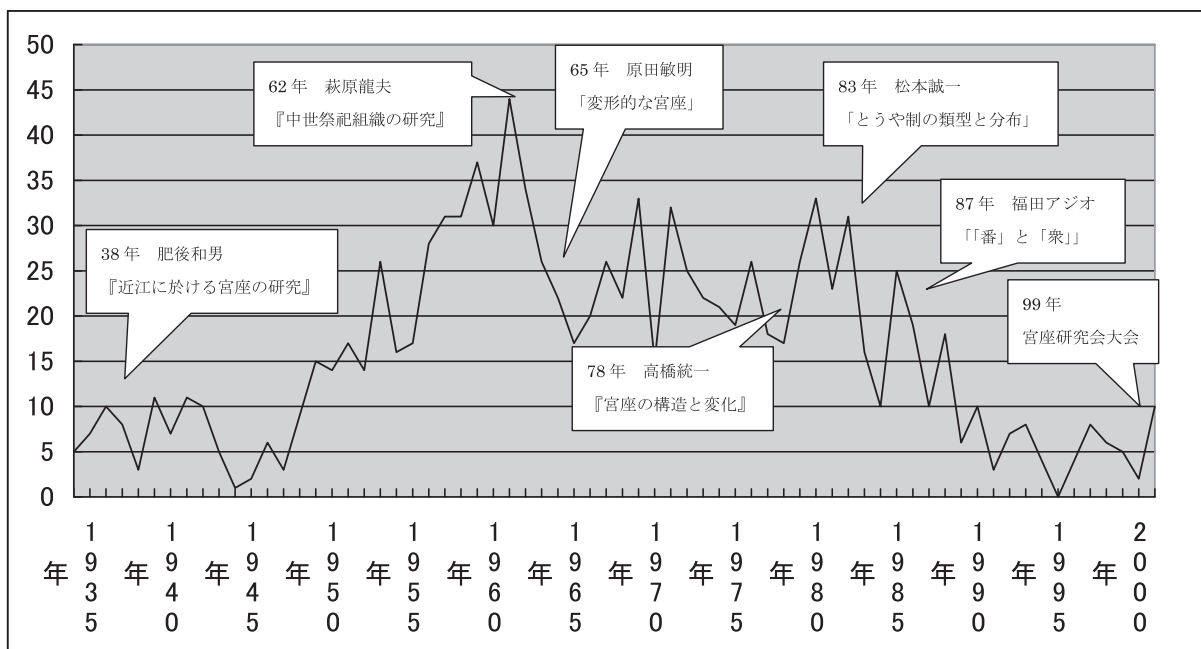
はじめに

宮座に関する研究は、かつては歴史学や民俗学、そして社会学など数々の分野がその研究対象として注目してきた課題であった。例えば住谷一彦は「日本民族Ⅱ文化の基礎構造を解明するうえに「宮座」とよばれている「村の祭祀」組織が占める比重は決定的である」と述べており、また福田アジオも「宮座は中世後期以降の惣村の成立とその伝統を明らかにする重要な材料であると同時に、日本社会の構造的特質を把握するためにも大きな手がかりを与えてくれる」とするなど、宮座研究については、村落構造論などの展開と共に各方面からその重要性が唱えられてきた。

それは、ひとつには宮座を題材とした研究について、歴史学や社会学など数多の分野の研究者が取り組むという、学際的な雰囲気の中から議論が醸成されてきたことも深くかわっているようにも見受けられる。しかしながら、研究課題の細分化が進んだ昨今の状況では、逆にその学際性が仇となったのか、宮座を主題化した研究がさほどの進展を見せないまま沈滞するに至っているようである。

もちろん民俗学においても、宮座という研究テーマはやや沈滞化傾向にあると見られている。実際、国立歴史民俗博物館によって刊行された『宮座文献目録』⁽³⁾によれば、宮座およびそれに類する事例を研究対象とした論文発表数は、一九六〇年代をピークに段階的に減少を続け、一九九〇年代には年間一ケタ台の論考しか世に出されないという状態にまで落ち込んでいることが見て取れる。もちろん、発表される論文の数がその研究対象の隆盛度を正確に反映している訳ではないであろうが、少なくとも活発な議論が展開されなくなっているという点では、宮座というテーマをめぐる民俗学からの研究についても、やはりこれは沈滞し

表1 年度別宮座関係研究論文本数



□内は主な「宮座研究」のトピックス

ているとあって差し支えないだろう。

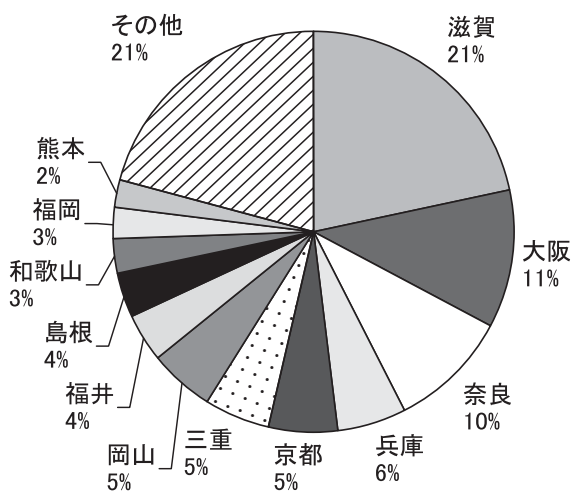
しかしながら、民俗として各地に伝承されている宮座祭祀は、村落史や村落共同体のあり方を解明する指標として有効であることは疑いがあるまい。例えばこの件について民俗学者の小栗栖健治は「宮座そのものの研究は、一つの到達点を迎えた観があり、伝承や習俗が急速に失われていることも併せて、その研究は低迷しているのが現状である」としながらも、「当初宮座の組織やその特権の分析に終始した研究が多かった歴史学の分野では、近年になって家の成立と家格制の問題などとの関わりが論じられており、これまで積み重ねられてきた宮座研究の成果が結実しつつある⁽⁴⁾」とも述べて、結論の提示されぬまま収束に向かいつつあった宮座研究の行方について、とくに歴史学の分野からの積極的な近接を期待している。

宮座という研究課題には、宮座史料というかたちで後世に伝来した文献史学からの分析と、現状伝承されている祭祀としての宮座に対する民俗学的な分析など、多方面からの切り口があり、しかしながら、それぞれの手法に依拠して導き出された成果には少なからず差異が見られ、それが埋められぬまま今日に至った観がある。宮座という課題を今一度各分野それぞれの研究の俎上にのせるためには、これまでの議論がどのような背景を持つ研究者からどのように提示され、またその議論が展開されてゆく過程で、その対象となった事例がどのように取り扱われてきたのかを検証する必要があるものと思われる。

① 宮座研究における近江の事例の位置

さて、宮座に関する研究史を整理してゆくと、とくに宮座の事例として取り上げられた地域について実に興味深いデータが導き出されること分かる。これは、先に引用した『宮座文献目録』から見て取れるもので、

表2 都道府県別にみた宮座関連研究論文対象地域の内訳



筆者は以前別稿にて長老制に関する研究史を精査した際、その論説が同様に滋賀県における事例を基本に構成されてきたことを指摘したが、宮座研究に關してもほぼ同様の事態が想定できそうである。それは、ひとつには宮座研究に先

同書には過去に発表された宮座に関する論考が年・筆者・論文名・雑誌名・号数・府県の各項目を挙げて整理されているのだが、このうち各論文が取り上げた事例の地域を都道府県別に明示した「府県」の項目に着目してこの目録を見ると、宮座の事例として過去に取り上げられてきた地域には、近江（滋賀県）のものが圧倒的であることが見て取れるのだ。実際、『宮座文献目録』に収録された一九一二年から二〇〇四年の約百年間に発表された全一四四七タイトルの論考のうち、総論的と判断された文献を除いた九三一の論文の中で、滋賀県内の事例を中心にその論が構成されたものは二〇三タイトルにも及ぶ。これは都道府県別に見た宮座の引用事例数において最多であり、しかも同目録に収集された全ての宮座関係文献中の実に二一パーセントを占めていることになる。宮座に関する研究が、過去約百年間にわたって全日本的に取り組まれてきた課題であるとするならば、滋賀県下の事例に対するこの偏重は少々異様とも言えるだろう。

この点に関して、

鞭をつけた肥後和男による滋賀県のほぼ全域を対象とした宮座に関するデータの蓄積があったことと無関係ではなさそうである、という事がある。肥後和男は、『近江に於ける宮座の研究』と、それに引き続いて刊行された『宮座の研究』の二つの著作によって宮座研究における大きなエポックを画する研究成果を世に問うているのだが、そこには滋賀県下で採集された宮座に関するデータが豊富に蓄積されており、以降の研究者にも肥後の示した資料や論考は頻繁に援用されている。

例えば高橋統一は、宮座を事例とした著作の中で「好都合なことに、前述の『近江における宮座の研究』には、昭和一〇年（一九三五）当時の滋賀県下の宮座のリストと分布図が掲載されているから、これを元にしてひとまず予備的広域調査を試み、その結果にもとづいて、若干の然るべき宮座を選定し、それらに対し集中調査を試みよう、と思つたからである。」と述べており、高橋の論の構築に、肥後の研究成果が大きく作用したことをうかがわせる。

肥後は『近江に於ける宮座の研究』の中で、昭和三年四月以来滋賀県の史蹟調査委員として同県内を踏査し、昭和六年の秋には御上神社の秋祭の宮座事例を見聞して宮座研究への端緒を捉え、昭和一〇年の前後より滋賀県の協力を得て県下の村社以上の神社を対象に調査票を配布して、一〇三六の神社中八四四社から得られた回答を基に、一名の助手と共に県下の調査を進めたことなどを述べている。高橋の研究にも見られるように、こうして形成された基礎的な調査データは、その集約性の高さもあってか、以後の宮座研究に積極的に活用されてきた。また肥後が滋賀県で得た宮座研究のコンセンサスが、研究史の中でも大きな位置を占めたことで、必然的に滋賀県の事例を活用した宮座研究はいきおい増加することとなったものと推察される。

民俗学において、特にその論を構築するにあたっては、これを展開する上で有効となるフィールドを設定することが肝要となるのだが、逆に、

ではなぜそのフィールドが対象化されたのかといった点に関しては、これに言及する研究者は少なかった。個々の宮座研究の中で、肥後の集積した滋賀県のデータがどの程度の位置を占めたのかは推測の域を出ないのだが、滋賀県をフィールドとした宮座研究が、ほかの地域に比して突出している背景に、肥後の示したデータ等の存在があったことは否定できないだろう。

そしてさらに、宮座研究の事例として滋賀県下のそれが頻繁に引用されるに至った理由として、文献史料の良好な残存状況がこれを後押ししたという事情も勘案されるべきであるものと思われる。宮座という研究対象には、それが中世惣村の成立や展開といった歴史的背景をもって存在してきたことが前提として挙げられ、故に歴史学などと民俗学との協業の可能性も示唆されてきたのだが、滋賀県下には、日吉今堀や大島奥津島、そして菅浦といった中世の村落構造を分析する上で重要な史料が幾つか伝来しており、そうした背景が研究者の目を滋賀へと向ける一因となったものと思われる。

以上のような観点から宮座研究を概観してみると、殊に民俗学の分野からの宮座へのアプローチには、滋賀県より採取された事例を基にその論を構築したものが数多く、それは先行研究として提示された肥後和男の業績に依るものと考えられる事と、宮座という研究対象が多分に歴史の変遷過程を意識する必要性のある存在であることから、特に中世惣村との関わりの中でこれが論じられるにあたって、中世史料の残存が歴史学などによる宮座研究のほぼ必須条件となり、それ故に数多の中世村落史料を有する事例を包含する滋賀での論展開が進行した可能性が指摘できるのであるまいか。

そこで本論では、宮座研究の各場面において滋賀県下の事例がどのように取り扱われてきたのかを、主に民俗学の側の研究業績から再度検証し、宮座論の形成にあたって滋賀県下の事例が果たした役割と、そこか

ら導き出される課題について検討してみたい。

② 肥後和男による宮座研究と滋賀の事例

先にも述べたように、宮座研究においては肥後和男の研究成果たる『近江に於ける宮座の研究』と『宮座の研究』の二著の影響は少なくはなく、また同時にこの研究によって宮座研究における近江（滋賀県）の事例の位置もまた重要視されたことは疑いが無い。そこで問題となるのは、実質的に宮座研究の端緒を開いたとも言える肥後の業績が、その後の研究をどのように導いてきたのかという点であろう。

この肥後の宮座研究に取り組む姿勢に対しては、近年になって市川秀之より興味深い指摘がなされている。市川は、肥後が提起し、その後の宮座研究において争点の一つとなった「株座」と「村座」についての言及を取り上げ、肥後が「村座」という概念を提示した背景には、肥後の宮座に対する認識のあいまいさがあったものと分析する。市川によれば、肥後は宮座の中に村座を加えようとしたために、組織を指すものである宮座を組織の面から定義できず「宮座の定義の中に行事の内容という異質なものを加えざるを得なくなり、その概念は一層あいまいさをますこととなった」のであるという。また市川は、宮座論を展開した肥後の心底には、当時の時局、つまり国家総動員体制下の日本の国情に適合した「祭政一致の思想」があったとする。そして「国家レベルの祭政一致を下支えする存在として村落レベルでの氏神を中心とした祭政一致があり、その象徴が宮座であるという前提が肥後の宮座研究の基盤には存在した」と断ずるのだ。⁽⁸⁾

市川によるこの指摘は、村座株座の論争を含む宮座に関する研究過程が、肥後によってミスリードされてしまった可能性をも指摘するものといえるのだが、こうした観点から肥後の宮座論を改めて見直してみると、

興味深い点が浮かび上がってくる。その一例として、滋賀県蒲生郡日野町蓮花寺の事例を挙げてみよう。

蓮花寺には長老講と呼ばれる組織があり、毎年四月に白髭神社で催されるどんじょ祭りにおいて、大組と小組の二つの座に分かれて祭祀が行われる。現在、大組と小組には、それぞれに所属する家筋の男子は皆加入することが出来る。なお、白髭神社には隣村の野出も氏神として参集しており、野出にもかつては一座が構成されていたという。

祭礼当日は、午前中から拝殿にて神事があり、このとき神社正面に向かって右に大組が、左に小組が地面に御座を敷いてそれぞれに分かれて座になる。大組と小組の者はそれぞれ平服で参加する。座の連中には、ねむの木でできた箸が配られ、巫女舞などの神事が終了すると各座に一献目の酒が供され、つづいて豆腐汁が出される。そして二献目の酒が出た後、行事の名前の由来ともなったどじょう汁が振舞われる（写真1）。



写真1 蓮花寺どんじょ祭

その後、神社に供えられていた供物が下げられ、両座に御供と鯛が配られる。そして、拝殿から社守が退席し、社務所で袴に着替える。このとき同時に子どもが相撲とりが白禪に着替える。そして、それぞれの座では、両座で新旧社守が旧を上座にして給仕人を挟んで向かい合い、トウヤの引継ぎが行われる。トウヤは大組小組のそれぞれから一名ずつが選任され、社守と

して一年間その任に当たる。トウヤは年長の順にまわってくるが、同年のものがあれば親が年長の者が先になる。また、トウヤの引継ぎと相前後して子どもの相撲が執り行われる。相撲の際には大組と小組の新しいトウヤが脇に立ち、子どもの相撲取りは同じ所作を二回繰り返す。相撲では勝負はつけない。子どもの相撲が終わると各座で謡が歌われ、これが終わると新社守は御幣を持って自宅に直行する。この時に社守は誰とも話してはいけないという。自宅に着くと、床の間に厨子が置いてあり、そこに御幣を収める。

この事例については、肥後和男の『近江に於ける宮座の研究』の中には「西桜谷村大字蓮花寺の白髭神社には、大組小組の二座あり、全氏子の男子が加入するが、餅二升を搗きて神供し、これを座中に配りて座人のしるしとする。」および「西桜谷村大字蓮花寺の白髭神社に古来長老講と称するものあり。その氏子区域たる大字蓮花寺に大組・小組の二座、字野出に一座あり。」とのみ記される⁽⁹⁾。現況の民俗事例には肥後の記録と大きく違う点はない。ただし、大組と小組のそれぞれには「神事細見録」なる史料が申し送られており、そのうち大組所有の「神事細見録」の記述には、嘉永六年（一八五三）と明治二十八年（一八九五）とに、それぞれ帳面の破損などを理由とした改訂が行われた旨が記載されている。ここでひとつ注意して見ておきたいのは、白髭神社の事例にみられる大組と小組の二座についてである。現状の民俗では、両座の間にヒエラルヒーの設定はなく、二つの座は神社の境内で全く別個に行事を執り行っている。そして最終的には神社の本殿にて神職による祭祀が全ての氏子を対象に催されるのだが、そうなると大組と小組という二つの座がいかなる機能を有するのか、はたまた、それぞれの座の構成員はそもそもいかにして配分されたのか、といった点が未解決のまま残されることになる。筆者は嘉永六年と明治二十八年の両度に行われた「神事細見録」改訂の背景に、時代背景に即応した何らかの座の再編成がなされたので

はないかと推察するのだが、いずれにしても、肥後の収集したデータを基にした記載からは、氏神の祭祀としての座の儀礼以上の要件を見出すことは難しいようである。

もちろん、蓮花寺の一事例をもとに肥後和男の示した研究の全てを断ずることはできないのだが、市川が指摘するように、宮座について肥後には、村の成員全てが参加する「村座」の性格が常に念頭にあった可能性は捨てきれないであろう。

③「典型的な宮座」「変形的な宮座」論争と滋賀の事例

さて、宮座研究における民俗事例の調査と対をなすもう一方のアプローチの方途として、文献史料からの宮座事例の精査という方法が従来よりとられてきたことはよく知られているだろう。そのうえで、元來、宮座ついで概念的理解は、例えば中山太郎が唱えるように「宮座の意義を概括的に云へば、宮座とは、その神社の祭儀、及び経営に関し、他の信徒（若しくは氏子）に比較して、特別な権限を有する氏子の組合を云ふもの⁽¹⁰⁾」であり、また豊田武が述べるごとく「宮座というのは、神社をめぐる祭祀組織であり、その祭祀集団の構成員はその神社ともっとも深い因縁をもつものであった。鎌倉時代の農村では、この宮座が極めて嚴重な封鎖的団体となっており、その神と関係のないものは一切祭祀に参加することを拒否されていた。ところが小農民が相ついで独立し、郷村の結合が進んでくると、この封鎖的な宮座も村民一般に開放され、誰でもその祭祀に参加できるようになった。」⁽¹¹⁾というような歴史的変遷の過程が先ず想起される対象として理解されてきた。

それ故に例えば宮座という研究対象を媒介として、歴史学と民俗学とが協業出来得る土壌が永らく保持されてきたのだが、一方の歴史学の研究手法の必然から、史料の残存を見ない、あるいは絶対的な史料の不足



写真2 椿神社の神門(近江八幡市千僧供町)

する対象については、それを研究の俎上に乗せ得ないという事情が常に出来た。そこで、これを補いつつ中世の村落構造等について一定の見地を構築するために、歴史学の側がその手段として援用したのがフィールドからの事例採取であった。実際、宮座研究における歴史学サイドの代表的な研究者である萩原龍夫は、次のように述べている。

もちろん現存の宮座を調査する場合中世文書を豊富に残している土地を選ぶのが、歴史的考察の上からは最も賢い方法であるにきまっている。しかしひどく皮肉なことには中世文書を豊富に残す今堀や奥島は宮座の慣行が希薄になってしまっており、反対に慣行が良く続けられている近江馬淵や奈良県生駒には中世文書が乏しい。近世文書となると話は別であるが、この方はまだ調査が行き届いていないから断定的なことはいえない【中略】そこでいまはとりあえず、かつて惣村結合が旺盛に見られその史料を豊富に残した地域に含ま

れ、且つ宮座の慣行をよく保持している地点を選んで、考察を加えることにする⁽¹²⁾。

そして萩原は、「筆者の経験の範囲内では宮座として非常に整然とした構成を現存しており、ここから得られる暗示は限りも無く大きい⁽¹³⁾」として、滋賀県近江八幡市馬淵における宮座とその行事の考察を展開するのである。

馬淵の祭祀は、近江八幡市の岩倉と千僧供、そして馬淵

の三つの集落によって執り行われる。これら三集落には、馬淵郷の大宮とされる馬見岡神社と、千僧供の氏神の椿神社の二社での儀礼を中心に結集する宮座がある。それは、まず外座と内座という枠組みにわかれ、外座には神部村・田楽村・神宮村・神村・氏村・幣村があつて集落をまたいで組織され、またそれぞれの集落にも、岩倉には宮講と寺講があつてそのうち年長者十名が長老講となり、千僧供には年長者十名によるジゲオトナがあり、そして馬淵には本村と神村とがあつてまたそれぞれにオトナと呼ばれる長老の組織がある。また、各集落はそれぞれに祭祀の中心となる神社をも有し、非常に複雑な祭祀組織の様相を呈している。

この馬淵郷における宮座事例は、その結集の背景に水利共同体としての様相をかつては有していたのであり、萩原は、この連合の祭祀組織が発達した理由を、用水関係による村落間の競合の様相について「外交的交渉によって打開する道を、厳密至極な祭祀儀礼を通じてくりかえし演出しようとした」と分析する。萩原はまた宮座事例を見てゆく視点として、馬淵の宮座を例に「祭祀組織には長い年月の集団の発展と変貌とが凝集し、古いものと新しいものが癒着しているのがふつうである。史料によってそれを分析したくとも、手がかりとなるものはなほ少ない。まして交通の便利な、外からの刺激を受けやすいこの地域に於て、祭祀の中世型・近世型をはつきりと分析することは不可能に近い⁽¹⁴⁾」とも述べている。

この萩原の論考に対しては、原田敏明が近隣の他の宮座事例との比較検討などにより、特に神主の在り方などからこれを「典型的宮座」とする萩原の説に異議を唱えている。原田は「馬見岡神社の場合には、そこで三カ村合同して宮座の行事を行なう。しかも世襲の神主もいない。そこに何か大きな変わった変化があつたのではないかと思わせるものがある。ここにあってこれを変形的な座というので、必ずしも典型的とはいえないものがあるように思う⁽¹⁵⁾」として、萩原による民俗事例の見立てに

反論している。この議論は、では宮座とはいかなる事象を指すのかといった課題を浮き彫りにし、宮座研究が学際的に盛り上がりをもせる契機となった。また、馬淵における宮座の事例は、その後の宮座研究を志す学者が少なからず触れねばならない基礎的な事例と目されるようにもなったのである。

この馬淵の宮座事例は、近年になって自治体などによる集約的な調査がおこなわれ、民俗的な見地からの全貌が次第に明らかになりつつある⁽¹⁶⁾。実際の馬淵郷の祭は、近世期における開発と用水関係の変遷によって早期に無意味化しており、その意味では萩原や原田のみた民俗としての馬淵の宮座は、全くの「生きた」宮座ではなかったことになる。

であるならば、馬淵の宮座をめぐる議論の意義はどこにあったといえるだろうか。米田実は、フィールドから採集されたデータ等から、この宮座事例が「対抗の歴史を持った三ヶ村の均衡的な秩序を維持するための儀式」に転じているとし、馬淵の宮座を象徴する「四分四分二分は神の水」という文言をして、「現在の言葉としてこのような言葉が、いささか「臆面もなく」刻まれ顕彰されたところに、この物語の「通時性」を指摘できる」と述べて、この宮座が地域の社会秩序を司る「物語」として在地の人々に把握され伝承されてきた可能性を指摘している。

米田の宮座に対する姿勢は、「近世宮座は歴史的に見れば「宮座遺制」であり、しかしなお相應の地位を占めて存続したことは、村政機関とは別に村落が一定の社会的機能をもつ集団として、積極的であれ消極的であれ評価するところがあったからであろう⁽¹⁸⁾」との文言に示される通りだが、これに関しては、筆者も意見をほぼ同じくするもので、多数の集落が介在する関係が水利を基盤として成立し、それら集落間の秩序を統御し維持することを目的として祭祀が位置付けられている事例は現実存在するとしても、それは必ずしも当該地域の水利的連環の中での真実である必要はないのであって、宮座などの事例において重要なのは、その

宮座を構成する観念が人々に共有されて、事実として執行され続けることに意味があるのだと考えている⁽¹⁹⁾。

萩原らによる馬淵の宮座をめぐる議論の展開は、ある意味において宮座研究における転機となった。そして、滋賀県下で採集された宮座の民俗事例は、萩原や原田らの研究を通して、歴史学の見地からの宮座研究に示唆を与える素材として認識されるに至ったのである。

④ イメージとしての「宮座」の構築

これまで見てきたように、宮座研究の議論が形成されてゆく過程において、滋賀県内に伝承されてきた宮座の事例が、そのポイントとなるケースが少なからずあったことは理解できよう。肥後和男が近江の事例を基礎にして提示した「株座」「村座」論は、現在でも決着を見ぬ宮座研究の課題であるし、萩原龍夫によって唱導された、歴史学からの宮座へアプローチする際の補完的資料として宮座事例を観察する姿勢もまた、未だ宮座研究の有効な手法として健在である。つまり我々研究者は、宮座の祭祀組織や伝承の中に中世以来の村落の様相を垣間見ようとしたのであり、それは中世の村落関連史料の残存如何によって、更に補強されることとなる筈であった。ところが、肝心の宮座に関する研究者の姿勢は、未だ定まることなく、むしろ歪むのである。

そもそも、中世の村落に対する考え方は、研究者の姿勢等によってまちまちであった。民俗学の中でも、例えば真野俊和は、「宮座において、その座は一定の秩序や規則のもとに座席が定められ、ときにはその集団や組織自体が「座」という名でよばれるのである。宮座を定義するさいの一つの有力な指標は、まさにこの一座するという特徴にもとめられる⁽²⁰⁾」と述べ、関沢まゆみは「宮座の特徴は、村人のうち一定の資格を得た男子のみの組織であること、内部には年齢秩序があり、とくに年長者

の長老たちに権限があること、終身制であること、などである⁽²¹⁾と述べ
るなど、細部において甚だ一致をみない。結局のところ、中世の惣村結
合にその起源を有するとされる宮座という課題については、往時の村落
に対して各研究者がどのようなイメージを持ち、またそのイメージをど
の程度共有できるかに依るのではないだろうか。

そうした観点から、滋賀県下の事例で、しかも中世惣村の様相を記し
た古文書を数多く有する菅浦の事例についてみてみよう。滋賀県長浜市
西浅井町菅浦は琵琶湖の北岸に位置する半農半漁の集落で、周囲の村々
と地理的に隔絶した条件から、様々な民俗が守り伝えられてきた。そし
て、菅浦を学術的に最も有名にしたのが、集落内の阿弥陀寺に保管され
てきた一〇〇〇点もの中世文書「菅浦文書」の存在である。中世の村落
自治の様相を詳細に伝えるこの文書群の発見によって、日本の村落史研
究は飛躍的に進展したと言っても過言ではあるまい。

菅浦文書に見られる村落組織の特徴については、原田敏丸が中世から
近世への変遷の様子を軸に簡潔にまとめており、それによると、中世菅
浦では年齢秩序に基づく宿老二〇名が村落を代表する統制の責任者とし
て位置付けられてきたものが、中世後期から近世初頭になると、中老と
いう地域代表的な性格をもつ役員が台頭し、ついには中老が二〇名の統
御責任者のなかに収まることとなったという。この変化の背景について
原田敏丸は、「中世末期の支配関係においては貢納支配を主とし、しか
も一村菅浦が同時に複数の領主的支配を受けていたのであるが、これ
に対し近世の菅浦村は膳所藩のみの単一支配にして、且つ貢納支配のみ
ならず村落内部にまで深くくいこんだ強力な人身支配を受けること
になった⁽²²⁾」ことがあり、村落の自治は近世期に入って大幅に後退するこ
ととなったとする。

同様の件に関して福田アジオは、近世中後期から近現代にかけての菅
浦の社会組織の変遷について、現在菅浦の内部で東西二地区から二名ず

つ出る計四名の長老衆に着目し、彼らが祭祀や儀礼のみの担い手ではな
く、共有財産の管理や村落内普請の差配など村落運営においても重要な
役割を果たしていることや、この四名の長老衆が、近世期には二〇名以
た中老に相当し、「それが明治以降次第に区長以下の役職者中心の運営
となり、ついには長老衆の人数もわずか四人となったものと判断され
る⁽²³⁾」ことなどを指摘している。

ちなみに現在の菅浦では、毎年春先に催される祭祀において須賀・小
林・赤崎の三社が祀られ、それぞれの神社を司る神主組が東組と中組と
西組のそれぞれに九名ずつ計二七名出て、そこから神主が各社一名ずつ
選ばれる。また祭祀当日には、神輿が菅浦の象徴たる東西の四足門の間
を往来し、その後で神主らによる幣祭りの儀礼が執り行われるが、この
時に神社境内で座的な様相が若干ではあるが展開される。



写真3 四足門(長浜市西浅井町菅浦)

さて、民俗的な見地から現在の菅浦の社会組織および祭祀儀礼を概

観しても、そこに宮座とま
で呼べそうな様相は見取
れない。先学の業績にも宮
座の具体事例として菅浦の
フィールドデータを引用し
たものは少ないと思われ
るのだが、原田敏丸や福田ア
ジオによって示されたとお
り、中世から近世を経て近
現代へと至る村落組織の変
化の過程をシュミレートす
る上では、菅浦の事例は格
好の素材を提供してくれる
ようである。菌部寿樹が唱

導するように、「もともと臈次成功身分であった年寄衆・座衆身分は、村落財政の変化により、近世には家を単位とする宮座組織において家格に固着する身分秩序にかわっていった。近世宮座が維持した家格制とは、非宮座構成員及び宮座構成員それぞれの家格をランクづけて権威化することによって、身分差別を維持するシステム⁽²⁴⁾」という見解に当てはめて考えてみるならば、菅浦の村落構造の変遷は、宮座を含めた歴史的存在としての「村」というものに対するイメージの形成に、大きな示唆を与えてくれそうである。

しかしながら、ここでひとつ注意しておかねばならないのは、研究者が受ける菅浦というフィールドからの印象は、どうしても「中世惣村の系譜を引く村」としての菅浦というファクター抜きには成立し得ない、ということである。これは宮座研究におけるフィールドデータの取り扱いについてもいえることで、前節において引用した萩原龍夫の言葉にもあるとおり、「とりあえず、かつて惣村結合が旺盛に見られその史料を豊富に残した地域に含まれ、且つ宮座の慣行をよく保持している地点を選んで、考察を加える」⁽²⁵⁾ことが、往時の宮座の様相を知り得る賛助にはなり得ても、現状の民俗が中世に直結することは考え難いのである。そこには当然、「宮座的なもの」を伝承してきた在地の側が、その民俗的事情によって事例の「書き換え」を行なってきた可能性の高いことを、我々は常に認識しておく必要があるだろう。

おわりに

以上、宮座を題材とした従来の研究について、そこに滋賀県下から採取された事例がどのような位置を占めてきたのかについて若干の考察を試みた。肥後和男による近江の宮座事例の猟歩に始まる滋賀県下の本格的な宮座研究は、「株座」と「村座」という宮座概念の本質にも迫る課

題を世に示し、また萩原龍夫が馬淵の宮座を題材として提起した「典型的な宮座」という言説もまた「宮座とは何か」という議論を醸成する契機となった。

ただ、肥後の宮座に対する研究姿勢への市川秀之の反駁にも見られる通り、滋賀県下の事例への偏重がみられる宮座研究には、若干の危うさもまた指摘できるものと思われる。また、民俗事例から類推された宮座と村落史との連関性についても、馬淵の宮座をめぐる萩原の説に対する「典型的」か「変形的」か、といった論争にみられる如く、宮座を研究する者達の事例に対する印象の如何によって、その様相は一変する可能性も孕むのである。それは当然、中世惣村のものとしてあまりにも良質な史料を数多有する菅浦の様態を、典型ととるか変形とするか、という事とも関連してくるだろう。

では最後に、宮座研究に対する筆者の見通しを示してみたい。本論でも取り上げた馬淵の宮座事例について、筆者もこれを観察する機会に恵まれたのだが、そこから受けた印象は、ほぼ萩原の推論と同様で、中世的な世界観の中で構築された宮座の遺制的システムが祭祀に反映されたものではないかといったものであった。それは一つには、一村落単位では比較的容易な社会組織の改編が、多くの利害を異にする集落が介在するために馬淵郷の三集落では困難であり、その解決策として、三集落間で相互に納得し得る「物語」を在地が必要とし、その結果が歴史的週及をもって構築された宮座の結集原理となつて、祭祀に反映されたのではないだろうかと筆者はみる。

このように、在地側によって設定された「物語」を軸に中世以来の村落関係が整理された例については、たとえば小栗栖健治が、滋賀県大津市の仰木庄の宮座について、その開発神話が仰木庄域において了解され、祭礼などにそれが反映されることで秩序の維持に一定の効果を挙げている事例を紹介しており、⁽²⁶⁾これに関しては藪部寿樹が、この仰木庄の「親

村」の史料をもとに「村落神話の政治的機能」について言及し、「村落神話には、領主の意図的操作の跡のみではなく、在地民衆の側の領主支配承認または不承認の論理が読みとれる⁽²⁷⁾」と述べるなど、現状の宮座事例に対する歴史学の分野からのまなざしの方向性について示唆を与えてくれている。

歴史資料に内在する伝承性と、その伝承成立の背景に対する考察は、これを積極的に起こすことでフィールドワークによる成果の深化と史料の多面的理解の促進を図りうる手法であり、宮座という課題と向き合う上において極めて有効なものはあるまいか。

上野和男は、宮座という研究対象の歴史的変遷過程と現状の民俗とについて、次のような見通しをたてて分析している。

(宮座は) これまでにも歴史的にいくつかの大きな変化を経験してきた。ひとつは、藩制村と家制度の成立に伴う中世から近世にかけての変化であり、この時期に、村落連合的な宮座から村落単位の宮座に変化するとともに、個人単位の宮座から家を単位とする宮座に変化した。いまひとつは、明治以降における株座から村座への変化、すなわち、村落の上層が祭祀を独占する形態から、全戸による対等的な祭祀への変化である。さらに現代では、村座化がいつそう急激に進行するとともに、宮座組織や儀礼・芸能も激しく変化しつつある⁽²⁸⁾。

滋賀県下の宮座事例を検証する際の留意点の第一は、こうした宮座についての歴史的变化の過程を常に意識して事例に対処し、且つ追える範囲の文献資料にあたりその道程をたどることであろう。宮座の変遷過程の凡例と、宮座が再編成される際に発生する地元の民俗的な力学への留意によって、宮座に対する理解はさらに深まるものと筆者は考える。

註

- (1) 住谷一彦「一九七五」三一九頁参照。
- (2) 福田アジオ「宮座」(『日本民俗大辞典下』吉川弘文館、二〇〇〇年)参照。
- (3) 森本一彦編「宮座文献目録2003年度版」(科学研究費補助金・基盤研究A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座データベースの構築」調査報告書一、二〇〇四年三月三〇日 国立歴史民俗博物館発行)
- (4) 小栗栖健治「二〇〇五」三九五―三九六頁参照
- (5) 橋本章「二〇〇一」参照。
- (6) 高橋統一「一九七八」一四頁参照。
- (7) 肥後和男「一九三八」五一―六頁参照。
- (8) 市川秀之「肥後和男宮座論の再検討」(二〇〇五年二月四日 京都民俗学会 年次研究大会の資料より)
- (9) 肥後「一九三八」九六頁、一三四頁参照。
- (10) 中山太郎「一九二四」二二―六頁参照。
- (11) 豊田武「一九四八」参照。
- (12) 萩原龍夫「一九六二」七四三―七四四頁参照。
- (13) 萩原「一九六二」七四三頁参照。
- (14) 萩原「一九六二」七六六頁参照。
- (15) 原田敏明「一九七六」一四三頁参照。
- (16) これに関しては和田光生・木津勝「馬淵郷の祭り」(『近江八幡の火祭り行事』一九九八年 近江八幡市教育委員会編) および『近江八幡の歴史 第三巻 祈りと祭り』(二〇〇七年 近江八幡市)等を参照のこと。
- (17) 米田実「一九九九」二八頁参照。
- (18) 米田「一九九九」二四―二五頁参照。
- (19) 橋本章「一九九九」を参照のこと。
- (20) 真野俊和「二〇〇一」一〇二頁参照。
- (21) 関沢まゆみ「一九九八」五七頁参照。
- (22) 原田敏丸「一九八三」五六―五七頁参照。
- (23) 福田アジオ「二〇〇二」三六頁参照。
- (24) 蘭部寿樹「二〇〇五」一五五頁参照。
- (25) 萩原「一九六二」七四三頁参照。
- (26) 小栗栖「二〇〇五」二〇一―二三〇頁参照。
- (27) 蘭部「二〇〇五」二九五頁参照。
- (28) 上野和男「現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築」(『平成15年度―平成17年度科学研究費補助金基盤研究A(1)研究成果報告書』二〇〇五年)はしがきより。

参考文献

- 小栗栖健治『宮座祭祀の史的研究』（二〇〇五年 岩田書院）
真野俊和『日本の祭を読み解く』（二〇〇二年 吉川弘文館）
住谷一彦「宮座」論ノート―村落構造の関連において―（『社会と伝承』第二四巻 第3号 一九七五年／峰岸純夫・福田アジオ編『日本歴史民俗論集6 家と村の儀礼』一九九三年 吉川弘文館 に再収録）
関沢まゆみ「老いと社会―年齢の輪の発見―」（平成〇年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 生・老・死…日本人の人生観）一九九八年国立歴史民俗博物館
蘭部寿樹『村落内身分と村落神話』（二〇〇五年 校倉書房）
高橋統『宮座の構造と変化』（一九七八年 未来社）
豊田武「日本中世の市場および座」（『新日本史講座』一九四八年 中央公論社）
中山太郎「宮座の研究」（『社会学雑誌』六一九二四年／『日本民俗学』一 神事編 一九七六年 大和書房に再収録）
萩原龍夫「中世祭祀組織の研究」（一九六二年 吉川弘文館）
橋本章「灌溉水利関係による多集落間祭祀の擬似性―滋賀県愛知郡愛東町上岸本及び同郡湖東町中岸本の事例から―」（『京都民俗』二七号 一九九九年）
橋本章「長老制についての再検討―近江・下笠の事例から―」（国立歴史民俗博物館研究報告 第九二集 二〇〇二年）
原田敏明「村祭と座」（一九七六年 中央公論社）
原田敏丸「近世村落の経済と社会」（一九八三年 山川出版社）
肥後和男「近江に於ける宮座の研究」（一九三八年 東京文理科大学 一九七三年 臨川書店より復刊）
福田アジオ『近世村落と現代民俗』（二〇〇二年 吉川弘文館）
森本一彦編『宮座文献目録 2003年度版』（科学研究費補助金・基盤研究A「現代の宮座の総合的調査研究および宮座データベースの構築」調査報告書一 二〇〇四年三月三〇日 国立歴史民俗博物館発行）
米田実「近世近江の「宮座」について―その意味付けと変容―」（『宮座研究大会 九九九資料集（宮座） 概念を考える―データベース化にむけて―』一九九九年 宮座研究会）
『近江八幡の火祭り行事』（一九九八年 近江八幡市教育委員会編）
『近江八幡の歴史 第三巻・祈りと祭り』（二〇〇七年 近江八幡市）
（滋賀県長浜市曳山博物館学芸員、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇〇九年二〇月二日受付、二〇一〇年五月二五日審査終了）

Position of *Omi* in *Miya-za* Studies : Meaning of the Case Example in Shiga Prefecture in the Formation and Development of *Miya-za* Theory

HASHIMOTO Akira

Studies on *miya-za* have attracted the attention of researchers of historical studies, folkloric studies, sociology, and other academic fields. Discussion on the subject had developed in an interdisciplinary environment in which researchers from various fields such as historical studies, sociology, etc. worked on the studies on *miya-za*. However, studies on *miya-za* have not made significant progress as research themes have been subdivided further. Nevertheless, the *miya-za* saishi inherited as a folk custom in each region is an effective indicator to clarify village history and the reality of village communities. To take up the subject of *miya-za* for discussion once again in the studies of each field, it will be necessary to verify how the past discussions were presented by researchers, what kind of background the researchers had, and how the target case examples were treated in the process of the development of the discussions. The full-scale research by Kazuo Higo on *miya-za* in Shiga Prefecture started from the research on the case example of *miya-za* in *Omi* such as Ryoho and made public the themes of “*kabu-za*” and “*mura-za*,” which approached the essence of the concept of *miya-za*. The interpretation of “typical *miya-za*” suggested by Tatsuo Hagiwara with the subject of *miya-za* in *Mabuchi* also sparked discussion on “what is *miya-za*.” However, it seems that there is some vulnerability in *miya-za* studies overemphasizing the case example in Shiga Prefecture. The aspect of the relationship between *miya-za* and the village history assumed from folkloric examples might also change completely depending on the impression for the case example of researchers of *miya-za* as seen in the discussion on whether “typical” or “transformational” against the theory of Hagiwara over *miya-za* in *Mabuchi*.

Key words: *Miyaza* document catalog, Higo Kazuo, Hagiwara Tatsuo, historical sources and tradition, narrative discourse